

一步を重ねた三〇か月 新たな前進をつくる支援を

池谷 潤

全国学童保育連絡協議会 事務局長

最初に、私の二〇一一年三月一日の記憶を書かせていただきます。あの日は、震災への対応で、南関東に住む私も遅い帰宅となりました。テレビでは、どのチャンネルも震災報道。疲れはてた表情の人々を映し出す映像のなかに、「おうちの人に会えない」と言い、しっかりと手を握りあつた友達同士とおぼしい小学校三年生ぐらいの子どもたちがいました。胸がしめつけられ、「学童にたどり着く前だったのか、学童が被災したのか」と思いが巡ります。子どもたちの背後のライトの輪のなかを、雪がななめにサッと流れていきます。この日、私の職場では様子見のあと、「室内より屋外が安全だ」と全員が庭に出ました。庭の木には新芽が出はじめ、太陽の光がそいでいました。不安ではあつたけれど、暖かい春の情景。これが南関東の三月一日です。いま、テレビに映るその子の背

後には雪が流れています。津波被害の大きかった地域の三月は、まだ春とは言えないのです。私は、知っていたつもりでしたが、それまで思っていたらなかつたのです。この「気温の差」が、各地の学童保育関係者の「温度差」にならないようにしなければ……と、いまあらためて思っています。

被災した地域の学童保育の多くは、以前から大変厳しい条件のなかで運営されてきました。公的責任があいまいで、市町村の格差も大きく、認知度の低さなどもあつて、支援が十分に届いていない状況は、今もなくなつたとは言えません。全国学童保育連絡協議会（以下、全国連協）は、現地の現状と必要とされていることを知り、私たちがができることはなにか、また、現地の方々が自ら解決していく課題はなにかなどについて、一つひとつ議論と取り

組みを積み重ね、現地の方々の思いや声を「知り・伝え・支援する」要となるべく努力してきました。

また、本誌では、二〇一二年五月号（四月一五日発売）に「震災：子ども心のケア」という記事を掲載しました。「心のケア」は子どもだけでなく、指導員自身にとつても大きな課題となつていきます。全国連協は、指導員の皆さんが自らをふり返るとともに、子どもたちが現れる行動や心を理解するための研修への援助なども進めてきました。そして現地でも、子どものおかれた現状、学童保育のあり方や制度に目を向ける取り組みが進められています。

被災直後から活動を始めた「宮城県学童保育緊急支援プロジェクト」は、自治体担当課と関係を築きながら、「研修支援」「心のケア」「被災および復興状況の調査・情報交換」「全国各地の連絡協議会との連携」「他団体との連

携・支援のコーディネート」「県内のネットワークの形成」などの支援を進め、それらを通じて、数々の交流を深めています。

福島県では、「各学童クラブ（放課後児童クラブ）の現場においても問題が山積、特に放射能問題は子どもたちにとつて避けて通れない大きな問題となつており」「個々の活動では、限界もあるとして、二〇一二年六月に福島県学童クラブ連絡協議会が結成されました。

岩手県は、県域の大きさ、沿岸部と内陸部の交通事情などから、全県的な交流に特別な努力が必要となつていました。岩手県学童保育連絡協議会では、震災復興担当の体制を強化し、独自の研修支援や連絡協議会のない市町村の担当課とも連絡を取るなどの取り組みを進めています。

被災した地域では、学童保育の利用

児童数が増えているところも少なくありません（二〇一三年五月、全国連協調査）。避難先での学童保育の開設や、自治体そのものが避難しているなど、学童保育の復旧・復興には、重層的な課題が生じています。

全国連協が協力を呼びかける「東日本大震災学童保育義援金」には、現在、四〇二二万二六九一円が寄せられています。お寄せいただいた義援金は、子ども心のケア、指導員の研修支援などに活用されており、関係者が学童保育のあり方を自らの課題として考え、「よりよい学童保育を子どもとその保護者のために」と歩みを進める力となつていきます。復旧・復興を進めるために手を携え、学童保育の役割を明らかにし、その実現への歩みをはじめた方々を、息長く支えていただくことを重ねて訴えます。全国の皆さん、あらためて、ご協力をお願いいたします。

* 東日本大震災学童保育義援金の振込先は、八三ページに掲載しています。